

新 歌人群像

土岐善麿

都会人の知性と行動

小高賢



江戸・東京文化の厚み

土岐善麿は明治十八（一八八五）年、東京浅草で、父善静、母観世の次男として生まれた（筆名湖友、哀果）。生家は真宗大谷派等光寺。雷門から徒歩で三、四分のところにある。東本願寺別院の近くで、周りに浄土真宗の寺がいくつもある。

当時の浅草は東京一の繁華街であった。多くの人出が日常的であった。吉原も近かった。善麿の生来の都会人的性向、あるいは自然より人事、人間に関心をもつのは、このような環境が陰に、陽に関係しているだろう。

また生家自体の教養も半端ではなかったらしい。父善静は挿花、聞香、点茶の宗匠であった。また柳營連歌の最後の師匠でもあり、俳諧でもその名を知られていた。正月などは、笙、横笛、ヒチリキといった雅楽合奏を家族で楽しむといったことが、当たり前であったという。このような江戸から地続きの文化の厚みが、身体にたつぷりと沁み込んでいたことは、歌人善麿を考える際、忘れてはならないポイントである。後年、中世和歌史のみならず、中国の漢詩を論じ、エスペラント語や能楽にも造詣の深かった多才ぶりは、そのよ



早稲田大学時代に結成した「北斗会」の仲間と。前列左より3人目が善磨、後列中央は若山牧水（明治41年）*

うな環境と無縁ではないだろう。

結社にもあまり関係せず、自分は素人歌人であるという発言の根拠には、自分を恃む自信があるからではないだろうか。

「同時代の歌人たちにくらべて、善磨には際立った特色がある。それはストレスなき歌人だということである。彼の歌には病苦も、失恋も女性問題もない。歌になりやすい条件は何もない。ストレスを持たない健康な目は、つねに国家に、社会に、家庭に、そして思想に、学問に、研究に向けられてきた。それが土岐善磨という人間の独往の歌を成しているのである」（冷水茂太「鑑賞土岐善磨の秀歌」）。

歌人という存在は、多かれ少なかれ、何かところに欠損をかかえ、それを短歌という詩型で埋めるようなところがある。そういう類型から、土岐善磨は出発点においてすでに解放されていたのである。

府立一中（現在の日比谷高校）に進学、同級生に石坂泰三（経団連会長）、一級下に谷崎潤一郎がいる。在学中に、金子薫園の白菊会に入り、短歌を作り始める。早稲田大学予科から英文科に進学。同級生の若山牧水や北原白秋と交友を深める。

また、当時、刊行された窪田空穂の第一歌集『まひる野』に震撼させられる。それ以後、空穂に対する尊敬の思いは、生涯、変わらなかつた。

明治四十一年（一九〇八）年、大学を卒業、読売新聞に入社。社会部記者となる。以後、ジャーナリストの道をすすむことになる。年譜によれば、杉村楚人冠を通じ、堺利彦を知り、大杉栄、荒畑寒村などとの交友もはじまる。

明治四十三（一九一〇）年、第一歌集『NAKIWARAI』を刊行する。なぜ、ヘボン式ローマ字短歌を試みたのだろうか。斎藤茂吉のいうように、「ハイカラであり、西洋的であった」ということもあるだろう。背景

には、そのころから、音読から黙読に移る時代的無意識が反映しているのかもしれない。一首だけ引用してみよう。

Waga gotoki Yononuehito wa,

Modae sezu,

Melorite, umite, oite, sinubeshi!

この『NAKIWARAI』を批評したことにより、石川啄木との交友が始まる。啄木の三行歌は、善磨の影響から生まれたといわれている。同人誌「樹木と果実」の計画など、その交わりはとても濃かつたようだ。啄木の死後、作品集の刊行など、実務的世話善磨の手になっている。啄木の墓が善磨の実家である等光寺にあることも付け加えていいことだろう。

かれ遂にこのひと壺のしろき骨、たつたこれだけになりけるかも。

『おい、これからも頼むぞ』と言ひて死にし、この追憶をひそかに怖る。

大正五（一九一六）年刊行の『雑音の中』のなかの思い出である。岩手出身の啄木にとって、都会人の善磨は頼れる兄貴であったのだろう。しかし、地方出身者の啄木がもつ、複雑な野心と嫉妬、上昇意欲と不満を、善磨

士岐善磨

はあまり理解できなかったのかもかもしれない。その分、悔恨もあり、啄木への責務意識がずっと残ったのではないか。

ジャーナリストと歌人

啄木への献辞が添えられている第二歌集『黄昏に』（明治四十五（一九一二年））は三行歌形式である。

指をもて遠く迎れば、水いろの、
ヴォルガの河の
なつかしきかな。

手の白き労働者こそ哀しけれ。
国禁の書を、
涙して読めり。



朝日新聞入社の際、家族と写す。後列、善磨と妻鷹子、前列左から次女子工子、長男健児、長女サチ子（大正7年）*

焼趾の煉瓦のうへに、
小便をすれば、しみじみ、
秋の気がする。

りんでん機、今こそ響け。
うれしくも、

東京版に、雪のふりいづ。

いかにも都会的な感覚の横溢した作品だろう。同じ三行歌でも、啄木と大分違っている。率直さ。明るさ。伸び伸びとした気分。時代閉塞の現状という時代気分よりも、闊達な善磨の社会意識が上回っているだろう。『不平なく』、『佇みて』、『街上不平』あたりまで三行歌は続く。その間、「樹木と果実」の後継誌「生活と芸術」の創刊と休刊、茂吉との論争など、読売新聞社会部長の激務のかわら、忙しい日々をすごすのである。

わかくして宗匠となるうた作りおぼき
を憎む秋の風かな。 『雑音の中』

もしあらば、われのとりえは疑はずひ
とを信ずることにあるべし。

一方で、どこか歌壇という現状や社会一般に異和を感じていた善磨がいる。新聞社を退職してパン屋になろうと、中村屋に相談にいった事実もあるらしい。読売新聞を辞めたが、

しばらくしたのちに、朝日新聞に入社する。ジャーナリストという仕事は、善磨にとって天職だったのだろう。茂吉、前田夕暮らを飛行機に乗せて短歌を作らせるアイディアも善磨である。駅伝の発案者だともいう。

燃えさかる野天の竈の焰のなかかの腕
はもよいつまでも焼けず

うしろより声をもかけず殺したるその
卑怯さを語りつくべし

関東大震災の体験をきっかけに、しばらく休んでいた短歌を再開し、出来たのが『緑の斜面』（大正十三年）であった。一首目は、本所被服廠での見聞である。二首目は交友のあった大杉栄と伊藤野枝が子どもとともに虐殺された事件を歌っている。ヒューマニスト善磨らしい作品であろう。

大正末の反アララギの短歌運動でもあった「日光」に白秋、夕暮、釈道空、古泉千樫、木下利玄らとともに参加、また「日光」解散のあと、前川佐美雄、坪野哲久、筏井嘉一らと、新興歌人連盟にも身を投ずる。そのあたりから口語自由律に関心をいだくようになる。このように土岐善磨の足跡を追っていると、一か所にとどまらない身の軽さを感じる。歌人としてはじめてゴルフをやったり、スポ

* 65、66ページ掲載の写真は「別冊1億人の昭和史 昭和詩歌俳句史」（毎日新聞社刊）より転載しました。



83歳の誕生祝いで。前列左より松井如流、善麿、山下秀之助、後列左より中村嘉一、冷水茂太、湯本善作、篠弘（昭和43年）

一ツへの関心、海外詠への試みなど、新し物好きでもあった。それは都会っ子の洒脱さの表れであるが、いわゆる歌人の範疇に入りにくい生き方でもあった。近代短歌史のなかでもやや例外的存在だったのではないか。

口語、そして戦争・戦後

噴火のように短歌に熱中するかと思うと、休火山のようになりをしずめる時期もある。それも土岐善麿のスタイルであった。

そつと寄りそつて腋のしたへ無言のピストルをさし向けさうな男の間を通る

はじめより憂鬱なる時代に生きたりし
かば然かも感ぜずといふ人のわれより
も若き

一首目は「新歌集作品1」（昭和八〜一九三三）年）、ニューヨークでの作品である。二首目は「新歌集作品2・近詠」（昭和十三年）のなかの作品である。いずれも口語自由律を生かした成果であろう。

軍部の台頭、そしてきな臭い事件が日本全土を覆うようになる。ジャーナリストとしてそれらの推移に危惧をおぼえながらも、次第にその激流に善麿も飲み込まれていかざるをえなくなる。もちろん、積極的、全面的な迎合ではない。ただ、抵抗しつつ、少しずつ視点移動させることが、結局、国家の意向に添うことになった。善麿の歩んだ道は、私たちの教訓にしてもいいように思える。

ジャーナリストとして、知識人としての内の葛藤が、作品として表出されたのが『六月』（昭和十五年）である。

かかる時に遭ひたるものはいまだかつて
あらざるゆゑの世相に直面す
賢きは市に隠れてもの言はず憤ほろし
もおろかにわれは

遺棄死体数百といひ数千といふいのちをふたつもちしものなし

これらの作品は「愛敵思想」が色濃く存在すると、時局迎合の歌人たちから、強く批難を受ける。とりわけ三首目は、善麿の代表作の一首であるが、きびしい攻撃にさらされることになった。

戦争下で時局についての発言が制限されるなか、善麿は『田安宗武の研究』を出版、戦後になって学士院賞を受賞する。ジャーナリストから学者に転身したのである。敬愛する窪田空穂の後任として母校の教壇にたったのは、昭和二十二年のことである。

戦後は国語審議会会長、都立日比谷図書館館長などを歴任、ひろい範囲の文化活動に従事した。また芸術院会員でもあった。

ふるき日本の自壊自滅しゆくすがたを
眼の前にして生けるしるしあり 『夏章』
あなたは勝つものとおもつてゐました
かと老いたる妻のさびしげにいふ

歌人としては驚くべき長寿に恵まれ、九五歳近くまで、広い視野のもと向目的な作品を作り続けた稀有な歌人であった。

（こだか・けん 「かりん」編集委員）